

学校力向上に関する総合実践事業の推進 ～9年間の実践を通して～

石狩市立花川小学校
学級数 14
(校長 高橋 秀明)

I はじめに

本校は、平成24年度から学校力向上に関する総合実践事業の指定を受け、9年が経過した。石狩市教育委員会のバックアップや各教育関係機関の理解、家庭、地域の協力、そして何よりも教職員の強い使命感によって、大きな成果を上げることができた。事業に関する会議や研修に参加し、他校の先行実践等の情報を得て、今後の取組の参考にしつつ、それまで積み上げてきた本校の取組を大切に、効果が期待できるものを吟味しながら、独自の取組をつくり上げてきた。

本事業における大きな目的は、成果を上げてきた取組の普及であり、裾野を広げるために2年前からは近隣3校（双葉小、緑苑台小）による授業交流、合同研修等の取組が始まった。今回は、花川小学校で取り組んできた9年間の実践をまとめ、成果と課題を明らかにしていきたい。

II 実践内容

1 学校マネジメント

(1) グランドデザインによる経営の重点の共有



教育目標を具現化するために必要な4つの要素

- ① 目指す児童生徒像
- ② 目指す児童生徒に必要な資質・能力
- ③ 資質・能力を育てるための手立て
- ④ 実践の成果を確認する視点

これらを全教職員が共有し、バクトルを合わせて取り組むことが効果的な教育活動を促進させ、チーム力や学校力の向上につながっていくと考え、4つの要素を網羅できるように作成した。

(2) 校内組織体制づくりと働き方改革の推進

<p>校内組織体制づくりのコンセプト</p>	<ol style="list-style-type: none"> ① 若手教職員を育てるサポート体制の確立(学年、分掌、研修等で若手教員がミドルリーダーを経験し、先輩教員がサポート) ② 学級担任の業務軽減をサポートする教科担任制の導入(書写、家庭科、図工等) ③ 特別対策委員会による組織的なサポート(特別支援教育コーディネーター、学級担任外を中心とする支援体制)
------------------------	--

働き方改革の推進	① 分掌業務の見直し	② 学級担任外による担任業務のサポート
	③ 校務支援システムによる勤怠管理	④ 定時退勤日・閉庁日設定の徹底
	⑤ 集金業務の軽減（振り込み化）	⑥ 勤務割り振りの完全実施
	⑦ 会議議案書、事案のペーパーレス化、職員朝会の回数削減	
	⑧ アンケート集約業務の自動化	

グランドデザインで示した児童に必要な資質・能力を身に付けさせる手立てについて、全教職員が一丸となって対応することが可能になるよう、校内組織の編成の工夫や働き方改革を推進した。特に、若手教員の育成に重点的に取り組むとともに、学級担任業務をチーム対応で軽減化（学級担任の空き時間をつくる工夫として、テストの採点業務を学級担任以外の教員で分担、補充学習のサポートを行う等）を図ることで、子どもたちと向き合う時間を生み出すようにしている。

2 教育課程、指導方法

(1) 学習環境の整備

- ① 掲示物の統一
- ② 教室のユニバーサルデザイン

視覚的な刺激となる情報量が多過ぎると児童の集中を妨げる原因となるため、教室の前方の壁面に掲示物を掲示しないなど、学習環境の整備を進めている。



【基本的に学級目標等は教室の後方の壁面に掲示】

(2) 学習規律及び生活規律の徹底

学習規律の徹底	① 「机上のホームポジション」
	② 「筆記用具のホームポジション」（用具の規定）
	③ 説明の聞き方
	④ ノートの取り方
生活規律の徹底	① 教室内のもの置き場のレイアウトの統一
	② 教室内外の徹底した整理整頓

学習の効率や児童の集中力を高め、落ち着いて学校生活を送るため、学習規律の定着や生活習慣の徹底に向けて、全員が一丸となって「隠れたカリキュラム（ヒドゥンカリキュラム）」を意識しながら指導している。

【実践の具体例】

- ① 机上はいつも同じ状態
- ② ノート、鉛筆、消しゴムなどの用具の規定
- ③ 姿勢は腰を伸ばして座る立腰を意識



【机上のホームポジションの様子】

(3) 日常の授業改善

① 「教えて考えさせる授業」の基本展開

前半 20分程度 【習得】	ア 課題提示
	イ 解決手立て
	ウ まとめ
	エ 確かめ問題
後半 25分程度 【活用】	オ 評価（理解度チェック）
	カ 応用問題
	キ 交流
	ク 自己評価

児童に見通しをもたせるための授業を重視し、同一単元において、誰が授業を行っても同じ展開で授業ができることを基本に、応用力を高めさせる「教えて考えさせる授業」を実施している。

左図の「ア 課題提示」から「オ 評価」までの前半を習得、「カ 応用問題」から「ク 自己評価」までの後半を活用とし、授業を展開している。特に、「カ 応用問題」では、解答時に説明文を書く取組（まとめの言葉を使って説明文を作成：学習内容の理解力の向上）を行い、言語活動

の充実を図るとともに、考えを広げさせる交流の位置付けを明確にし、授業改善を推進している。

② 統一した板書のきまり

学習展開が一目で分かるよう、全学年で統一した板書のきまりを設定し、課題提示は青色、まとめは赤色、重要事項は黄色と、チョークの使い方を工夫したり、意図的に式、答え、説明、まとめを明記したりすることで、児童が家庭学習の復習に活用できるノートづくりに生かしている。

板書の統一

オ 評価

- ・確かめ問題後に、定着度を挙手によって確認

ア 課題提示

- ・本時において身に付けさせる資質・能力を明確化
- ・学習課題の焦点化(見直し)

イ 解決手立て

- ・課題解決に向けて、例題にて、手立てを式や図、数直線等を用いて提示 (まとめ方)

エ 確かめ

- ・確かめ問題による課題解決の確認
- ・まとめで示された解決方法を用いて解決
- ・方法、まとめ方を確認すると共に定着化

カ 応用問題

- ・実生活に活用できる問題を意識した課題を提示
- ・式、答え、説明文(まとめの言葉を使って、交流に活用できる文章の作成):必ず3点セットで回答

キ 交流

- ・目的に合わせた形態による交流活動

ク 自己評価

- ・一行感想による自己評価

ウ まとめ

- ・課題提示に直結したまとめ
- ・解決方向を明確に示し、振り返りと共に、意見交流や相手への説明に活用できるまとめを意識

ノートを意識した板書

- ・ノート点検
- ・振り返り
- (家庭学習)

③ ノート指導

板書と整合したノートづくりに向けて指導の充実を図っている。また、応用問題に取り組む際には、解き方の説明を文章で記述させ、理解力の向上を図っている。ノートは、授業の交流時に互いに見せ合ったり、家庭学習で授業の振り返りを行ったりする際に活用している。

④ 交流の位置付け

学習展開時に交流を位置付けるとともに、交流の目的を明確にし、交流形態を工夫することで、自己の考えを広げたり、思考力を深めたりする効果的な交流活動を推進している。

ペア	自分の考えを確かめ、自信を深める。(気軽に意見が言えたり、相談したりできる。)
グループ	他者の考えを参考にして、自分の考えを広げたり、深めたりする。
全体	他者の考えを参考にして、思考を広げたり、全員で考えを練り上げたりする。

⑤ 個に寄り添う複数指導体制

加配教員による算数科の習熟度別少人数指導や給食前及び放課後学習会をとおして、個に応じたきめ細かな指導・支援を行っている。(例 算数科の習熟度別少人数指導：年間108～140時間、給食前学習会：週5回、放課後学習会：週4回)

⑥ 基礎学力を保障する指導

最低保障テスト	○ 「読み、漢字、計算」の3つの項目について年2～3回実施 ・児童の実態把握、個別指導の強化(正解率8割を上回るまで繰り返し補習)に活用
ドリルの有効活用	○ 全学年で共通したドリルを選定 ・授業、朝学習、家庭学習で繰り返し活用(再利用できるようノートに解答を記載) ・一斉学習での個人差の対応として活用し、学習内容の確実な定着、応用力の伸長

学級担任以外の教員を中心に基礎学力を保障する指導として、学習内容の定着状況を確認するために「最低保障テスト」を定期的実施している。また、一斉授業での反復学習や補充学習のテキストとしてドリルを活用し、基礎学力を定着させる取組の充実を図っている。

⑦ 学力向上を支える心と体の育成

学力向上には、心と体づくりを加えたバランスのよい教育が必要なため、体づくりや心を育てる取組も併せて推進している。

- ア チャレンジマラソン(基礎体力)
- イ チャレンジ縄跳び(基礎体力)
- ウ 読書活動啓発の推進(言語活動、情操教育等の充実)
- エ 保健室からの情報発信(健康促進、体調管理等の充実)
- オ 栄養教諭からの情報発信(食育、体づくりの啓発)



【チャレンジマラソンの様子】

3 人材育成

(1) グランドデザインの作成

目指す教師像の実現に必要な3つの資質・能力として、「①専門性:指導力(どのように学ぶのか)」「②素養:人間力(何を身に付けるのか)」「③連携:協働性(どのように考え、動くのか)」を示し、その資質・能力を身に付ける手立てを位置付け、初任段階・中堅・ベテラン教員等、各キャリアステージの役割を明確にし、それらを全教職員で共有することで、人材育成に向けた取組を促進している。

